

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：33804

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11827

研究課題名（和文）統合失調症の闘病記における回復過程のテキストマイニングと内容分析

研究課題名（英文）Text mining and content analysis of recovery process in autobiographical documents by people with schizophrenia.

研究代表者

小平 朋江（KODAIRA, Tomoe）

聖隷クリストファー大学・看護学部・准教授

研究者番号：50259298

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：統合失調症の闘病記・手記・当事者研究をテキストマイニングと伝記分析で量的・質的に分析した。その結果、語りを公開（Uncovery）し、対処法を発見（Discovery）することと回復（Recovery）は関連が深く、仲間（Peer）と出会い、支え合いながらリカバリーのプロセスを楽しむことの重要性が明らかになった。語りを公開することによる回復過程を「UDR-Peerサイクル」と命名し図式化（モデル化）した。

研究成果の概要（英文）：Text mining and qualitative content analysis of recovery process of people with schizophrenia were done based on their autobiographical documents including Tojisha kenkyu (group self-study). We found the tricycle relationship consisting of three components: Uncovery, Discovery, and Recovery. The process of uncovery is disclosure of narrative based on their unique experience. The process of discovery is to find out the essential nature and practical ways to improve experiential hardship positively. The process of recovery is to enjoy life by sharing their own experience with peers. We call this tricycle process UDR-Peer cycle, as an important model for recovery of people with mental disorder as well as their family members.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神看護学 統合失調症 闘病記 当事者研究 テキストマイニング リカバリー ナラティブ教材
伝記分析

1. 研究開始当初の背景

入院中心の医療から、地域の中で当事者が生活していく支援という精神看護学での理論と実践の変化がある。統合失調症では病名変更が2002年になされ、家族や当事者の意識が大きく変化してきている。Peplau理論の流れをくむBarkerはTidal Modelにおいて、当事者にとって重要なのは、自分の「物語を取り戻し、生活を回復する」ことであると述べている。当事者視点の回復過程に関する研究は精神看護学にとって重要な課題であるが進んでいない。その要因として統合失調症の症状や障害の特徴が関係すると考えられる。当事者の回復の物語がある闘病記には当事者援助機能が指摘されている。統合失調症当事者で心理学博士のDeeganは「リカバリーは過程であり生き方」と述べた。Ridgwayは手記の分析を行い「サバイバー・ミッション」に言及した。八木(2011)は手記の出版をめくり「自分の病気を社会に向けて語る行為は、逆境に対する個人の反発力(広義のレジリアンス)の現れ」とした。野中(2011)は新たなリカバリー概念にとっての当事者の手記活動の重要性に言及しリカバリーのヒントが満載としている。八木や野中は、特に浦河べてるの家の「当事者研究」(「自分の助け方について研究すること」向谷地,2009)の実践には、語りもたらす回復やリカバリーという点で注目している。長嶺(2009)は、発病前に戻そうとする「治癒」の発想が患者を苦しめるとし、病気を経験したからこそ得られる成長に目を向けるプロカバリー(procovey)の造語の登場に言及しながら、前に戻るのではなく、前へと進むイメージでの回復の視点について述べている。闘病記はがん看護分野などで看護教育への活用が行われている(門林ら,2007;岡本・長谷川,2007)。心光(2013)が精神科看護師は「どのような回復像を持って支援」しているのか視点が明らかでない」と指摘した。

以上のことから、本研究は当事者の視点から多様な回復のあり方を明らかにすることで、当事者にとっては地域生活実現のための知恵を得て新たなリカバリー概念を導き、教育にとっては豊富なナラティブ教材(小平・いとう,2009)を提供することが可能となる。この研究成果は当事者視点を大事にした新しい時代の精神看護学教育の方法が具体的に展望できるとの位置づけである。

2. 研究の目的

統合失調症闘病記にみる回復の語りについて、当事者の視点からその回復過程をテキストマイニングを活用することで明らかにする。筆者ら作成の217冊の闘病記リスト(小平・いとう,2012)から複数の闘病記を伝記分析とテキストマイニングで分析する。質的研究と量的研究が結合され、当事者視点による回復が明確になる。そのことは統合失調症の回復とは何か、当事者の病いの体験や語り

に基づき、その意味や新たなリカバリー概念を導くと考えられる。その結果、統合失調症からの多様な回復のあり方が見出される。

その成果を看護学教育においてナラティブ教材(小平・伊藤,2009)などで活用することで、統合失調症を抱えながら生きる当事者の姿をリアルに伝えることができる。それは当事者視点を大事にした新たな精神看護学教育を切り開くものである。

3. 研究の方法

統合失調症闘病記の特徴で、本人執筆当事者研究(浦河べてるの家) 家族執筆の3種類がある。種類別に数冊ずつ選択して異なる立場からの回復とは何かを分析し、テキストマイニングと伝記分析法で分析し、量的・質的な可視化を試みる。

闘病記は、筆者ら作成の217冊の闘病記リスト(小平・いとう,2012)を活用して選択する。テキストマイニング(NTTデータ数理システム社)で個別分析・比較分析を行う。筆者らの先行研究で用いた基礎統計量、評判分析、注目語分析、ことばネットワーク、特徴語分析等の手法による分析を行う。個人または複数の当事者にとっての特定のテーマや重要な単語に焦点を当てる形でテーマ(主題)分析を行う。「原文参照」機能によりエビデンスに基づく分析を行う。回復の語りを公開している浦河べてるの家の「当事者研究」の実践の場で資料収集を行い、量的研究と質的研究の成果を互いに補完し合いながら統合し、病いとその回復の物語を総合的に考察する。これらの結果から見えてくる統合失調症の回復過程の図式化、可視化を行う。

倫理的配慮として、本研究の分析対象は一般に出版・公開されている雑誌であり、著作権に配慮し著者の表現や言葉などを改変せず、引用部分を明示し、出典を明記した。

4. 研究成果

(1) 本人執筆

西純一執筆の闘病記の分析

統合失調症当事者である西純一の著書『精神障害を乗り越えて:40歳ピアヘルパーの誕生』(2007年出版、文芸社)を分析対象とした。著者の闘病生活が綴られ、ホームヘルパー2級の資格を取得し、ピアヘルパーとして支援した利用者の方々との関わりあいを通して、著者の統合失調症からのリカバリーが語られている。本書の内容を個別分析(西平,1996)し、テキストマイニング分析した結果、単語頻度分析で使用頻度の高い単語の1位は「仕事」で、本書では一貫して「仕事」を話題にしていた。著者は「仕事」「リカバリー」について以下のように言及している(原文参照)。「Tさんのためになりたいという思い」「苦労もあったが、仕事を与えられたことによって、病気はどこへ行ってしまったのだろうかというくらいに症状が消えつつあった」「このような過程を専門用語ではリカバリー

ーと言うらしい」「ピアであるからこそというか、ピアであるためにできる仕事」などである。

利用者のためになりたい思いを綴りながら、自身のリカバリーを語っていると考えられる。これはヘルパー・セラピー原則 (Gartner & Riessman, 1977) のメカニズムに通じるものであり、統合失調症からのリカバリーであると考えられる。

『こころの元気+』表紙モデル記事の分析

メンタルヘルスマガジン『こころの元気+』(2007年からNPO法人コンボが出版)の編集の方針は、精神疾患をもつ当事者の視点に寄り添い、「リカバリー」の考え方が根底にある。最大の特徴は、当事者が主役で表紙は当事者で当事者が執筆した多くの体験談が掲載されていることである。

本研究はビジュアル・ナラティブ(やまだ, 2015)を切り口にして2つの研究に取り組んだ。第1の研究は、創刊2007年3月号(通巻1号)~2015年7月号(通巻101号)までに発表されたモデルの人たちの、「私モデルになっちゃいました!」100記事の全文をテキストマイニング分析した。リカバリーしている人の気持ちを知るため形容詞に注目すると、出現頻度の多い単語は「よい」「楽しい」「うれしい」などであった。名詞では上位に「統合失調症」が出現した。

原文参照すると、「病気をもって今はよかったと思うからです」(菅原俊光さん)、「私が統合失調症と言われたのは、二〇代前半でした。何回も人退院をくり返しましたが、今は毎日楽しくデイケアに通っています」(藤崎伸一さん)、「夢は、自分が体験したつらさを、苦しめる人のお役にたてられたらうれしいです」(沼田大市さん)、「私は、統合失調症です。看護師として、大学病院に正職員で勤務していた時期もあります」(伊藤克子さん)、「私たちは、統合失調症です」(小林竜也さん・宗田千麗さん)、「ボクの父ちゃんと母ちゃんは、統合失調症という病気なんだって」(中田孝博さん・幸さん・心くん)、「統合失調症ですが、5年位前から注射のおかげで薬もずいぶん減り、症状も幻聴がなければ病気でないのかと思うくらいよくなりました」(佐々木長英さん・池田智香さん)

この分析結果より、リカバリーをしている人は、病いととも生きる経験をポジティブに捉え、その経験を人々と共有したい思いから、社会に発信している人が多いことが示された。Ridgway(2001)の「サバイバー・ミッション」が多くの撮影参加者にみられた。家族やパートナーと登場している場合もあり、同様の境遇にある家族や、これから家族を作ろうとしている人にも、病いととも生きる家族のイメージを持つことを可能にしてくれる。

第2の研究は、前述の100記事から、当事

者が表紙モデルになる動機と理由を分析することである。28記事にはモデルになった動機や理由の明確な30の記述が得られた。その動機や理由の例を原文参照すると、「病気で、私たちのように、イイおつきあいをしたり、結婚等もできるということを皆さんにも伝えたくて、表紙モデルに応募しました」(小林竜也さん・宗田千麗さん)、「親のすずめと、少しでも病気に対する偏見(怖さ等)をなくしたいという願いからです。…病気になっても前向きに過ごしている姿を見てもらい、親近感を持ってもらえたらなと思いました」(清水香奈さん)、「表紙モデルに応募した目的は、自分がネット上で運営する『こころラジオ』のPR」(小熊俊雄さん)、「今回表紙の撮影に挑んだのは、ここまで回復した自分の姿を見てもらいたいという思いがあります」(井澤吉弘さん)などである。

このような記述の意味内容を読み取りながら、意味の類似性に沿ってカテゴリー化を行い質的に分析したところ、10のサブカテゴリーで構成され、さらに2のカテゴリーに集約された。2のカテゴリー<人のためになりたい><自分を知ってもらいたい>について、さらに、その意味内容を検討した結果、【人に伝えたい自分がある】に集約され、これを全体テーマと位置づけた。この結果は、向谷地(2015)が「自分の言葉で語ることができた時に回復がはじま」としたことに通じる。言葉で語る行為を通して社会に発信することは、当事者・支援者の境界を越え、社会が多様なリカバリーを理解し共有できることを可能にする。『こころの元気+』が、このような場やきっかけを作ることによって、当事者と社会とを結びつけていると考えられる。

この2つの研究から、表紙モデルの仕組みは、精神障害からの多様なリカバリーのあり方を、当事者・家族・支援者など様々な立場の読者にとって、「モデル」として共有することを可能にしているといえる。素顔の開示とリカバリーの多様な物語りがあるビジュアル・ナラティブにより、リカバリーのあり方のヒントを知ることができ、当事者にとっても社会にとっても新たな可能性を導くものである。

(2) 当事者研究(浦河べてるの家)

『レッツ!当事者研究』の分析

べてるしあわせ研究所・向谷地生良『レッツ!当事者研究』の1・2巻(2009年・2011年出版、NPO法人コンボ)を分析対象とした。本書では6分野の苦勞別に章立てがなされ、計36件の当事者研究の成果が掲載されている。

出現頻度の高い上位10単語は「自分」「苦勞」「人」「研究」「仲間」「仕事」「浦河」「お客さん」「わかる」「幻聴さん」で、当事者研究とは自分と病気の苦勞と人間関係に関する研究で、「回復」の使用頻度は非常に低いことが明らかになった。そこで、「回復」に

着目して原文参照すると、『『全力疾走』からの回復』(伊藤知之)「回復してきて、幻覚妄想大会でグランプリを取ることができました」(亀井英俊)「回復するために発見したことを、他に悩んでいる人に伝えてあげたい」(亀井英俊)「回復までの期間を整理しました」(江良泰一)「仲間と一緒に回復していきたい」(浅野智彦)などの記述があり、仲間と共に、回復のプロセスで、自分が発見したことを悩んでいる人や社会に伝えたい思いに言及していた。浦河べてるの家の当事者研究の成果は、病気と上手につきあいながらの人生や生活の取り戻しをした回復の姿であると言える。

当事者研究の「自己病名」「研究テーマ」の分析

当事者研究は本人の苦労の研究で、科学論文と同じ体裁(大高・いとう・小平, 2010)をとる。研究テーマは「悩みや行き詰まり」(向谷地, 2009)で、自己病名は「自分たちで一番実感できる自己流の病名」(伊藤, 2007)である。自己病名と研究テーマの表現の特徴を明らかにすれば、当事者視点からのリカバリーに示唆が得られると考える。『こころの元気+』に連載中の120記事の「べてるの家の当事者研究」から、自己病名と研究テーマを抽出しテキストマイニングと質的内容分析で量的・質的に分析した。

自己病名については、「統合失調症」の表記を含む57個を、その記述内容の意味の類似性に沿って、「しょうじひとし(症状・自分・人・仕事)とのつきあい」の4つにカテゴリー化できた。

研究テーマで出現頻度の高かった上位10単語は、「研究」「付き合う」「苦労」「メカニズム」「幻聴さん」「当事者研究」「脱却」「仲間」「助ける」「爆発」であった。

このことから、自己病名や研究テーマにより当事者視点での苦労が可視化され、成長と発見がなされることで、生きづらさを仲間と共有し、症状のメカニズムを解明し症状をコントロール可能なものにしていくことから、「経験専門家」(野村, 2017)の視点が重要で、「人としてのリカバリー」(Slade, 2013/2017)のプロセスに役立つ意義があると考察した。

前述の(1)と(2)までの研究成果を根拠に、語りを公開(Uncovery)し、対処法を発見(Discovery)することと回復(Recovery)は関連が深く、このようなりカバリーのプロセスを「UDRサイクル」と命名することにした。

向谷地生良『精神障害と教会：教会が教会であるために』の分析

浦河べてるの家の支援者である向谷地生良の思想と実践の全貌を捉えることは容易ではないが、近著『精神障害と教会：教会が教会であるために』(2015年出版、いのちの

ことば社)で、浦河べてるの家が生み出した当事者研究やりカバリーの考え方の原点を知ることができる。テキストマイニングの手法により、向谷地生良の当事者研究の視点から統合失調症をもつ人のリカバリー(回復)の考え方を中心に、思想と実践の特徴を明らかにするために、テキストマイニングによる量的分析と、質的な分析の両方を用いる混合研究法を採用した。

出現頻度の多かった上位10単語は、「人」「教会」「もつ」「いう」「思う」「かかえる」「人たち」「大切」「統合失調症」「考える」であった。好評語の上位には、「人」「教会」「人たち」「つながる」「経験」の単語があり、不評語の上位には、「現実」「人」「経験」「出来事」「つながる」があった。

本書は、リカバリーについての向谷地生良の思想が述べられている貴重な文献であり、人間関係に関わる援助の重要性が、単語の頻度や好評語・不評語分析からも明らかになった。リカバリーの医学的側面、生活的側面、主観的幸福の側面が指摘されている。向谷地生良のアプローチは、PSWでありクリスチャンである立場から、生活的側面と主観的幸福の側面、そして助け合うコミュニティ形成を重視している。人の苦労と悩みは、宝であり恵みであるとする主張は、仲間とともに研究で、それらを共有することが当事者研究のユニークな点である。そのユニークさを支える当事者研究における聴き方のスタンスは、向谷地生良のいう「並立的傾聴」である。この対話のスタンスは、当事者研究を成果として公開、発信する際、語り手にも聞き手(参加者=聴衆)にも共有されている重要なものである。

この研究は、浦河べてるの家の支援者の著書の分析であるが、当事者研究の理念を深く考察するために貴重な文献であり、本分析を通して、理念をより深く理解することができた。

(3) 家族執筆

統合失調症の母親を語る体験から、夏栞(2015)は「強く生きる道程を作ってくれた」と述べ、糸川(2016)は「安心して受け止めてもらえる仲間がいること」の重要性を述べた。前述のように、語りを公開(Uncovery)し、対処法を発見(Discovery)することと回復(Recovery)は関連が深い。本研究では、精神障害をもつ人の家族の語りにUDRサイクルがどのように生じているかを明らかにする。

『こころの元気+』(NPO法人コンボ)2014年3月号~2017年3月号に連載の「家族のストーリー」34記事をテキストマイニング分析し、記事全体の話題の特徴を把握した上で、注目した単語「家族会」の記述内容から、意味の類似性に沿ってカテゴリー化した。

その結果、出現頻度の高い単語は、「娘」「家族」「自分」「病気」「思う」「息子」「元気」「言

う」「病院」「家族会」「人」「統合失調症」「入院」などであった。「家族」「家族会」の原文参照で、「新しい家族との出会い、経験が共有される喜び、私も誰かの役に立っているという思いはモヤモヤした心を元気にしてくれました」(倉澤政江さん)、「私の心をほっこりさせてくれたのは、我が子のはげしい病状体験を堂々と話す先輩家族たちの笑顔でした」(岡田久実子さん)、「家族会に出会い、私が元気になりました。その頃から少しずつ娘も落ち着き始め...何よりも安心感をもらいました」(松永マサ子さん)などの記述があった。カテゴリー化の結果、<自己開示する><学んで力をつけ、腹をくくる><家族が回復する><仲間の支えを得る>の4つに集約された。

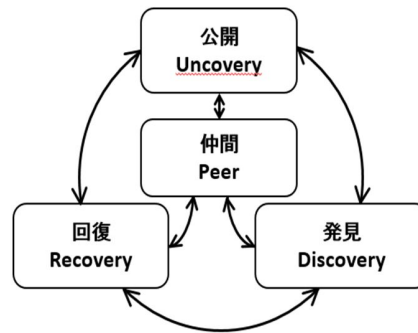
以上のことから、「家族のストーリー」の語りはU(公開)であり、家族会との出会いがD(発見)につながり、家族のR(回復)が生じる。蔭山ら(2015)や横山(2017)は家族会の活動を通して自分の体験が他の家族メンバーに役立つ喜びや活動を通しての成長を指摘した。本研究でも「私も誰かの役に立っている」思いを確認した。家族にとって「家族会」は「ピア」との出会いであり、この体験によるD(発見)とR(回復)がU(公開)につながったといえる。家族会の場合のピアとの交流は、互いにリカバリー(R)を支え、洞察(D)を促し、読者と共有(U)することでのUDRサイクルが生じていると考察した。加えて、この(3)の研究成果を根拠に、リカバリーのプロセスである「UDRサイクル」には、サイクルを支える仲間(Peer)の存在が非常に重要である捉え、「UDR-Peerサイクル」と発展させ命名することとした。

(4) 総合考察

研究期間中、闘病記や手記を収集し、他にも分析用にデータ化していたが、筆者らは、当事者がリカバリーの語りを公開する場に参加しながら、当事者との交流を通して試行錯誤を重ね、最終的に分析の対象として選択したのは、『こころの元気+』から計254記事、単行本4冊となった。

浦河べてるの家の「べてるまつり」など精神障害をもつ人たちが語りを公開する場に参加する際には、交流の中で筆者らの研究を発信し、共有することで、本研究を発展するにあたり、当事者・家族・支援者・研究者の立場を超えて貴重な刺激を受けてきた。

本研究の成果から見出し、図式化(モデル化)できたものが、語りを公開することによるリカバリーのプロセスであり、それを以下に示すように「UDR-Peerサイクル」と命名した。この「UDR-Peerサイクル」では、特に、仲間と出会い、支え合いながらリカバリーのプロセスを楽しむことの重要性が明らかになった。



また、本研究の分析結果はビジュアル・ナラティブ(やまだ,2015)と共通性が高く、この概念に関連づけて論文を作成した。これは当初、まったく想定していなかったことで、本研究の発展と同じ時期にビジュアル・ナラティブの研究が展開していたことが大きい。顔を隠さないビジュアルがあり、それに加えて語りがあるビジュアル・ナラティブにより、リカバリーの物語で、多様な「モデル」を人々と共有することを可能にし、精神医療保健福祉の領域においては、アンチスティグマの視点からも非常に重要なアプローチであると考えられる。

(5) 本研究の意義と課題、今後の展望

本研究の意義は、当事者の視点からリカバリーのプロセスが明らかになり、図式化(モデル化)できた点である。特に、テキストマイニングの手法は、単語頻度分析など分析結果が可視化され、誰とでも共有しやすく、「みんなの気持ち」の可視化(谷山ら,2013)や、「新たな事実をあぶり出す」(いとう,2013)ことを可能にしたといえる。

今後の課題と展望として、以下のふたつがある。ひとつは、今回の研究成果で明らかになったヘルパー・セラピー原則や、<人のためになりたい>思いとの関連から、公開されているピア(経験専門家)として活動している人の経験に焦点を当てた分析である。ふたつめは、ナラティブ教材の教育的活用としてアクティブ・ラーニングへの可能性を探ることである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

小平朋江、丹羽大輔、いとうたけひこ、メンタルヘルスマガジンの表紙になる：精神障がい者の自己開示とリカバリー、N：ナラティブとケア、査読無、第9号、2018、82-88
小平朋江、いとうたけひこ、浦河べてる

の家の当事者研究の語りとりカバリー：
テキストマイニング分析、心理科学、査
読有、Vol.38、No.1、2017、55-62
DOI： [https://doi.org/10.20789/jraps
.38.1.55](https://doi.org/10.20789/jraps.38.1.55)
小平朋江、いとうたけひこ、研究発表『こ
ころの元気+』からリカバリーを発掘す
る！、メンタルヘルスマガジン『こころ
の元気+』、査読無、Vol.11、No.3、2017、
21-23

〔学会発表〕(計 14 件)

小平朋江、いとうたけひこ、精神看護学
教育におけるナラティブ教材の活用：UDR
サイクルの重要性とアクティブ・ラーニ
ングへの可能性、日本看護学教育学会第
28 回学術集会、2018

小平朋江、いとうたけひこ、べてるの家
の当事者研究におけるアンカバリー（公
開）・ディスカバリー（発見）・リカバリ
ー（回復）：研究目的に焦点を当てたテキ
ストマイニング、日本精神保健看護学会
第 28 回学術集会・総会、2018

小平朋江、いとうたけひこ、メンタルヘル
スマガジン『こころの元気+』を研究
する。、第 5 回こころのバリアフリー研究
会総会、2018

小平朋江、いとうたけひこ、精神障害を
めぐる「家族のストーリー」におけるア
ンカバリー（公開）・ディスカバリー（発
見）・リカバリー（回復）：連載記事のテ
キストマイニングからみた家族会などの
活動の重要性、第 13 回日本統合失調症学
会、2018

小平朋江、いとうたけひこ、べてるの家
の当事者研究における自己病名と研究テ
ーマのテキストマイニング：メンタルヘル
スマガジン『こころの元気+』を分析対
象にして、日本質的心理学会第 14 回全国
大会 in 東京、2017

小平朋江、いとうたけひこ、精神障害を
もつ人々の回復の語りのテキストマイ
ニング：メンタルヘルスマガジン『こころ
の元気+』100 の表紙モデル記事における
話題の特徴、第 12 回日本統合失調症学会、
2017

小平朋江、いとうたけひこ、精神障害当
事者の自己開示とりカバリー：メンタル
ヘルスマガジン『こころの元気+』表紙
モデルの動機と理由および特集タイトルの
分析、第 28 回日本発達心理学会、2017
小平朋江、いとうたけひこ、当事者研究
とりカバリーの思想：向谷地生良(2015)
『精神障害と教会』のテキストマイニ
ング分析、第 36 回日本看護科学学会学術集
会、2016

Kodaira, T., & Ito, T. Psychological
approach to Tojisha Kenkyu studies of
people with mental illness. 31st

International Congress of Psychology、
2016

Ito, T., & Kodaira, T. Soul and science
unite in Tojisha Kenkyu studies of
people with mental illness. Global
Human Caring Conference、2016

Kodaira, T., & Ito, T. Visualization of
Tojisha Kenkyu studies: A text mining
approach to recovery. 19th East Asian
Forum of Nursing Scholars、2016

小平朋江、いとうたけひこ、ある統合失
調症闘病記のリカバリーとヘルパー・セ
ラピー原則：西純一『精神障害を乗り越
えて：40 歳ピアヘルパーの誕生』の
内容分析およびテキストマイニング、日本心
理学会第 79 回大会、2015

小平朋江、いとうたけひこ、闘病記を用
いたナラティブ教材に対する統合失調症
の回復の学生の受けとめ方：テキストマ
イニング分析より、第 35 回日本看護科学
学会学術集会、2015

小平朋江、いとうたけひこ、当事者研究
の可視化：テキストマイニングによる探
求、第 12 回当事者研究全国交流集会 in
浦河、2015

〔その他〕

ホームページ等

聖隷クリストファー大学 教員情報

小平 朋江

[http://gyosekiweb.seirei.ac.jp:8081/scu
hp/KgApp?kyoinId=yimgyosgy](http://gyosekiweb.seirei.ac.jp:8081/scu
hp/KgApp?kyoinId=yimgyosgy)

いとうたけひこ研究室

<https://www.itotakehiko.com/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小平 朋江 (KODAIRA, Tomoe)

聖隷クリストファー大学・看護学部・准教
授

研究者番号：5 0 2 5 9 2 9 8

(2)研究分担者

伊藤 武彦 (ITO, Takehiko)

和光大学・現代人間学部・教授

研究者番号：6 0 1 7 6 3 4 4